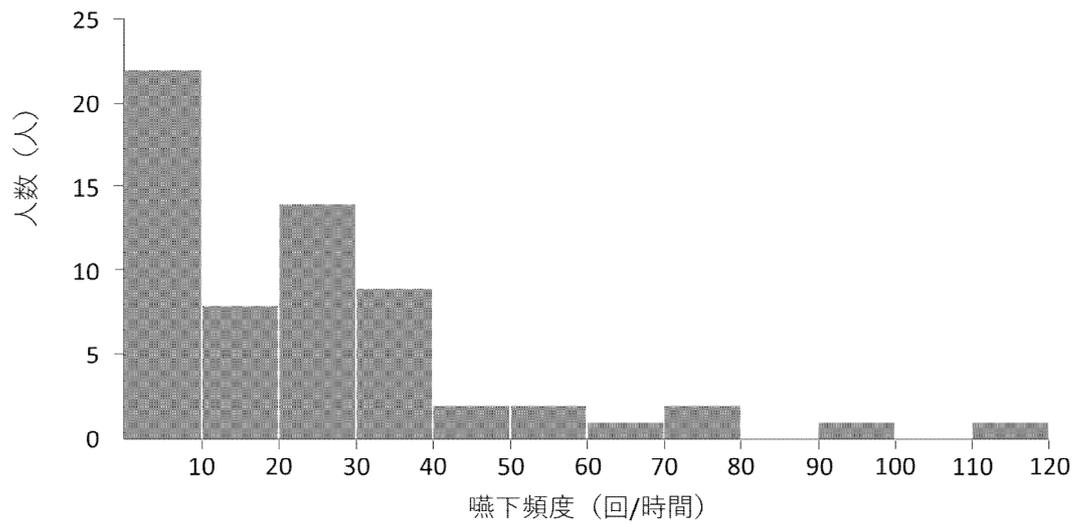


令和3年度 臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：顎口腔機能治療部
第3期中期目標・中期計画期間中の臨床研究テーマについて該当するものにチェックを入れてください。（塗りつぶし可）
<input type="checkbox"/> 1. 口腔領域における新規組織再生・再建法の開発 <input type="checkbox"/> 2. 高齢者の特性に配慮した口腔疾患の予防法・診断法・治療法の開発 <input checked="" type="checkbox"/> 3. 顎口腔機能の維持増進に関する研究 <input type="checkbox"/> 4. 歯科医学臨床教育の質保証に関する研究 <input type="checkbox"/> 5. その他
研究期間：2019年～現在
研究課題名：重症心身障害児者の日常生活における嚥下頻度の測定
<p>研究課題の概要及び成果：</p> <p>重症心身障害児者（重症児者）における嚥下機能の低下は、疾患の進行や加齢の影響だけでなく、廃用により修飾・助長されると言われている。廃用は、活動や運動量の低下、すなわち習慣的に行われていた運動の頻度が減少することから生じる。そのため嚥下機能の廃用は、嚥下運動に関連する器官を使用する嚥下頻度が影響をされると考えられる。しかしながら、これまで重症児者の日常の嚥下頻度や経口摂取の有無での変化については明らかではない。そこで本研究では、重症児者の嚥下機能維持のためのプログラムを開発するために、重症児者の日常生活における嚥下頻度の測定を行った。</p> <p>対象は、医療福祉センターに入所中の重症児者62名とした。各被験者の日常生活での1時間の嚥下回数をそれぞれ3回ずつ測定し、各被験者の嚥下頻度と、嚥下頻度のばらつき（同一被験者では、嚥下頻度は一定しているのか否か）を検討した。その結果、1時間当たりの嚥下頻度は平均 22.92 ± 22.89 回であり被験者間で多様な値をとった。一方で同一被験者の3回の嚥下頻度においては $ICC = 0.89$ (almost perfect) であり、被験者内の信頼性は高かった。この結果、被験者間において嚥下頻度は多様であり個人差が認められた。また被験者内において嚥下頻度は大きく変動せず、一定の範囲に収まっていた。このことから、重症児者における嚥下頻度は嚥下運動に関わる筋の日常の活動頻度を示す指標となり得ると考えられた。</p>
上記概要・成果に関連する図表等



	平均値 (標準偏差)	中央値	最小値 - 最大値
嚥下頻度 (回/時間)	22.9 (22.9)	21	1 - 111

当該臨床研究が「口の難病プロジェクト」に関連しているか否か下記のBOXのいずれかにチェックを付してください。(塗りつぶし可)

- 関連がある
 関連はない